「選ばれる」玉野高へ

ケイリンや和歌　地域密着型授業に力

住民参加の「運営協議会」導入

エリアNOW

玉野高（玉野市築港）が、中学生から選ばれる学校づくりを地域と連携して進めている。2020年度に住民らが学校運営に参加できる「コミュニティ・スクール（ＣＳ）」を導入し、21年度以降、選択科目や教育課程を充実させ、地域色豊かな授業を積極的に展開していく計画だ。（矢吹喜一朗）

「シャーーーーー」

10月20日、独特の音を響かせながら玉野競輪場（同所）のバンクを自転車でさっそうと走っているのは選手ではない。体育の授業を受けている玉野高3年生の13人だ。日本競輪選手会の内藤敦岡山支部長ら現役選手が五輪競技の「ケイリン」を指導。生徒はバンクの試走やスタート練習で約1時間汗を流した。

近藤北斗さん(18)は「現役選手から走るこつを教えてもらえて、とても貴重な体験」と話し、内藤選手も「授業を通して、若い人たちに『自転車のまち玉野』を根付かせたい」と意欲的だ。

「ケイリン」授業は23年度以降、芸術や体育分野への進学を目指す芸術科学系の生徒らが選択できる科目「スポーツ探究」へ組み込まれる予定。22年度は3年生の授業で試験的に行っているという。

体育の授業として玉野競輪場のバンクを自転車で走る玉野高の3年生

きめ細かな指導

同高はＣＳの運営を担う市民や事業所、行政、教育関係の代表らで組織する学校運営協議会を20年度に発足。会合での意見を踏まえ21年度から単位制普通科に移行した。文系・理系だけだった教育課程の学系を、「芸術」や理数・工学の「自然」、語学・教育の「人文」など五つに増やし、きめ細かな進路指導ができるようにした。

また、「スポーツ探究」の科目以外にも、玉野ゆかりの平安時代の歌人・西行の和歌などを題材にした「瀬戸内の文学」や、小学生に生徒が楽器指導を行う「音楽実地研究」といった地域密着型の授業を展開。23年度以降も魅力アップを図る。

同高の竜門巧指導教諭は「地域の中から生徒のニーズに応えるものを拾い上げて授業や探究活動に反映させていきたい」。同協議会副会長の山根一人玉野商工会議所会頭も「学校とのつながりを深めることで地域にも活気が生まれる。生徒が地元をもっと好きになるような教育を期待しているし、こちらからも提案したい」と話す。

厳しい〝争奪戦〟

少子化などで中学生の確保に苦労する中、県内高校の〝争奪戦〟は厳しさを増している。玉野高の一般入試競争率は19年度0・86倍、20年度0・92倍、21年度0・88倍と定員割れが続いた。単位制普通科に移行した翌年の22年度は1・02倍と持ち直したものの、県平均（1・08倍）は下回ったままだ。

加えて23年度からは一般入試に先立つ特別入試の募集枠上限が総定員の50％から80％に拡大。一般入試のみの同高にとって、さらに不利になりかねない。

藤原修校長は「生徒確保はどこも厳しい。だからこその取り組み」とした上で「授業を通して地域の良さを生徒に認識してもらうことで、将来、岡山や玉野を活性化しようと志す人材を育てていきたい」としている。